

今こそ怒りを解き放ち 『60・3』に決起しよう

勝利闘争ジェット三里塚 砕粉革行・調臨

組合員のみなさん。すべての国鉄労働者のみなさん。中曽根の「戦後政治の総決算」をかけた国鉄労働運動解体攻撃になすすもなく屈服し、再び三たび侵略戦争への道を許してよいのか。労働者の未来が決せられようとする重大な事態に直面し、今闘えなくていつ闘うというのか。労働者の積もりにも積もつた怒りを今こそ解き放ち、敵・支配階級に叩きつけてやらねばならない。国鉄労働運動にとって「60・3」こそ、ひきつづく10万人首切り、「分割・民営化」を阻止するか否かの緒戦の勝敗を決する決戦の場である。全力をふりしぼって闘おう。

もう我慢できな

国鉄当局は国鉄「再建」のための独自案として一月十日、「経営改革のための基本方策」なるものを国鉄再建監理委員会に提出した。

「方策」の骨子は、「徹底した効率化により、65年度には一八万八千人体制で収支均衡がはかれるよう関連事業の拡大等の増収をはかる。そのために62年4月を目途に民営化する」というものである。

七月に予定される再建監理委員会の「分割・民営化」答申、中曽根の「今年の内政課題は国鉄と教育」との年頭の決意に応えた当局の「方策」は、徹底して労働者を犠牲にする反動プランであり、断じて認めることはできない。

すなわち「60・3」とは、「方策」でいう「62年の分割・民営化までに八万三千五百人、65年までに一四万四千五百人へ削減する」ための大量首切り、労働強化、基地統廃合にむけた突破口の攻撃である。

従って、これを許すか否かが今後の労働者の一切を決するのだ。

「座して死を待つより起つて闘おう」を今こそ全国鉄労働者のものとせよ

しかるに、国鉄労働運動の状況はどうか。攻撃のすさまじさの前に労働組合が屈服し、敵

の「再建」論議にのせられ、

「60・3」と対決し

闘う姿勢を後景化

させ、右へ右へと

流されていく（下）

見るもおぞましいファシストのピラ。

という危機的な状況がまんえんしつつある。動労「本部」革マルにおいては「骨身を削る」方針のもと、敵の先兵としてたちふるまい、つぎつぎと敵の攻撃のエスカレーターを誘いこんでいる。「三本柱の実効をあげよう」と称し、当局になり代って組合員を「出向」「休職」にかりたてている。

まさに、動労「本部」革マルの「職場と仕事と生活を守る」方針は、革マルの「拠点」を残すためにのみ組合員を敵に売り渡していく「職場と仕事と生活を奪う」路線に他ならない。すべての国鉄労働者のみなさん。

こんな裏切り者に「分会役員さん、君達のスト方針、どこへ行つたんでしょね（動労田端支部『田端のたたかい』26号）」「やると思えばどこまでやるさ、それが男（分会役員）の命じゃないか（動労新鶴見支部『ひびき』20号）」などと全く愚劣で反動的なタワゴトをいわせておいてよいのか。鉄労など足元にも及ばないほどの悪どい大裏切りをつぎつぎとくり返し、今や完全に当局の先兵第二労務課として自らの組合員すらをも売り飛ばしている反労働者の輩、そして必死に抵抗し、何とか闘いの突破口をと苦闘している多くの

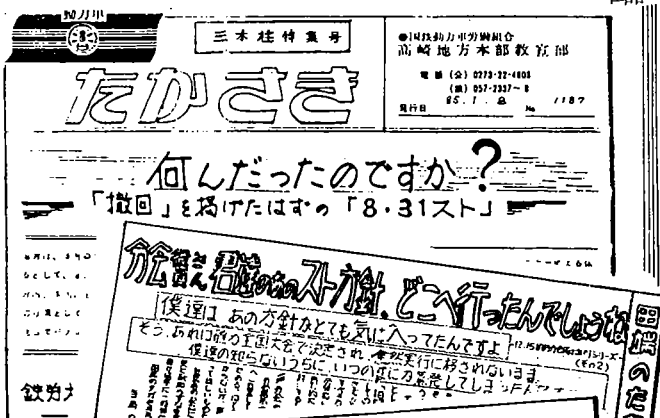
国鉄労働者―動労千葉や国労に背後から襲いかかる彼らファシストまがいの輩にこんな汚らしいタワゴトを言わせておいていいのか。今こそ国鉄労働者の誇りと意地にかけて、こんな反動分子どもを粉碎・一掃し、「60・3」粉碎のために、実

力で決起していこうではないか。かつて、マル生攻撃のさ中で、当時の国労中川委員長は「座して死を待つより起つて闘おう」と呼びかけた。この言葉を今全国鉄労働者のものとして決起しなければならぬ。

動労千葉は断固として「60・3」に実力決起する。三里塚二期攻撃と時を同じくしてかけられた国鉄労働運動解体攻撃は、中曽根の侵略戦争にむけた「戦後政治の総決算」をかけた一大反動攻撃だ。

「三里塚・国鉄を基軸とした労働運動」路線のもと、労働者の未来をかけて闘いぬこう。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよ！



見るもおぞましいファシストのピラ。